

[論文]

ナラティヴ ほぐ 物語を解す

—国立療養所大島青松園で結ばれたキリスト教霊交会の歴史記述—

阿部 安成

I

香川県高松市庵治町の国立療養所大島青松園に、キリスト教信徒団体のキリスト教霊交会がある（以下、霊交会、とする）。創立は1914年のことという。大島への療養所設置は、法律第11号「癩予防ニ関スル件」などの施行を根拠とした。1909年の療養所運営開始から5年後の信仰集団の結成だった。

2014年に創立100年をむかえる霊交会の歴史は、これまでに2つの史誌のなかに記されている。1つが『癩院創世』、もう1つが『霊交会 創立五十周年記念誌』である。どちらも現在の霊交会会員にとっては公式の歴史、いいかえれば正史として念頭におかれたり読まれたり、また来訪者に示されたりしている本である。ここでは、霊交会とそこに集った人びとをめぐる100年の歴史を考えるにあたって、まず前者の『癩院創世』をとりあげることとした。この史誌はなにをあらわしているのか、あるいは、よりいっそうこの書物ににじり寄って、それがなにを露わにしまったのかを探ることが、ここでの読み方となる。

史誌を読むまえに、霊交会の始まりのたどり方を示しておこう。さきにわたしは、霊交会の「創立は1914年のことという」と曖昧な書きぶりをした。その理由は、わたしはまだ、そのときのいわば出生証明書を手にしていないからだだった。

霊交会では機関紙『霊交』を1919年に創刊したという。ここでも曖昧な記述となったそのわけは、『霊交』はその創刊号からしばらくのあいだの号がいまだみつかっていないからである。霊交会教会堂図書室には、壁面いっぱい大きなとりつけの書棚がある。その左端の最上段にかつて『霊交』の束が仕舞われていた。図書室の書棚をあけると

すぐ目につくそれらの束には、1927年以降発行分の機関紙が紐や繻帯でくくられていた。そのうち図書室の蔵書目録をつくるなかであれこれと本をうごかしていると、1922年10月以降発行の『霊交』がでてきて、さらに小さな手帳につづられた霊交会の日記も手にとることができた⁽¹⁾。その手帳の最初のページには、霊交会創立1周年のときの日録がペンのインクで記されていた。この手帳日記がいまのところもっとも古くに霊交会の会員によって記された霊交会の記録である。霊交会はその創立時の記録がなく、結成後5年めにしてようやく創刊された機関紙も初期の3年分の所在がわからず、さらには霊交会設立以前の大島での信仰をめぐるようすを記した同時代の記録がない——これが霊交会の初期とそれ以前の歴史をめぐる文献の残りぐあいなのである。そうしたなかで、『癩院創世』という史誌の読み方と、霊交会100年の歴史を記すときのそれらの史誌の活用法を示すことが、本稿の目的となる。

2012年の現在は、霊交会創立100周年を目前にひかえたといいうるときであり、また、大島での霊交会についての悉皆調査をほぼ終えたといってよいときでもあり、その歴史を記す機と手立てとが熟したときとなった。

わたしたちは、霊交会とそこに集った人びとを、史料に即してどのように叙述できるのか。

II

ここでとりあげる『癩院創世』の書誌情報をあげると、著者が土谷勉、発行人は木村武彦、1949年5月25日の発行、定価35円がついた販売物である。発行部数や流通経路を報せる記録はない。表紙には、「癩院創世」「土谷勉著」の文字と、腰に

(1) 霊交会教会堂図書室での『霊交』などの調査については、阿部安成「長田穂波日記1936年—療養所のなかの生の痕跡」(3)(4完)（『滋賀大学経済学部研究年報』第15巻、2008年11月、『彦根論叢』第375号、2008年11月）、同「史伝としての『霊交』—大島療養所基督教霊交会の機関紙を史料化する」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.132、2010年5月)などを参照。この手帳日記の全文はべつの稿で公開する予定。

布を巻いただけの裸夫が、手にしたスコップで西瓜か瓜か南瓜の実る畑を掘るすがたを描いた絵が載る。表紙右下には「TAKEHIKO」のサインがみえる。手にとるものの目をとらえ、その脳裏に印象を刻む表紙をもつ『癪院創世』は、多くの療養所図書室の書架でみかけた、よく普及したとわかる本である。

本書の図書としての構成をみよう。表紙をめくった最初の1枚には、「大島青松園長野島泰治氏に捧ぐ」の献辞が印刷され、それをめくったつぎの見開き左のページに、「園内キリスト礼拝堂」(上)と「大島青松園全景」(下)のタイトルがついた2葉の写真が掲載され、それをめくったページの右に「瀬戸内の春の女木男木／島二つ／せうた」の俳句があり、左のページには本書書名と著者名が印刷された扉となる。ここまでを本書本文にさきだつ、本書をとりまくようすについての第1の案内とすると、扉以降が第2の案内となつて、「聖言」^{レフアランス}、木村武彦による「序」、「大島青松園の沿革」、「土谷勉略歴」、「目次」、本書構成への附記とつづく。その附記は、「写真 大島青松園全景」「凸版 大島青松園見取図」「装幀 木村武彦」「題字及び俳句 小河原庄太夫」との4行の記述である。さきにみたとおり、本書掲載写真は2葉あり、また凸版印刷によるという見取図は掲載されていない。

著者である土谷の略歴は5筆の一つ書きにわたる。1909年(原文は元号暦)に「岡山市北方ノ山村二生」まれたこと、「県立倉敷ノ中等学校ヲ中退後発病」したこと、1929年12月21日に「大島青松園ニ入所」したこと、「入園以来二十年間、入園者総代ソノ他ノ役員ヲシツツ今日ニ至」ったこと、「本年四十一歳、現ニ創作ニ専心ス」との近況も示されている。著者土谷は大島青松園在住者であり、本書「あとがき」と略歴一つ書きの最後に記されたとおり、「サヴェルが日本にキリスト教を伝えてから四百周年」、大島に「癪療養所が開設されて四十周年」、「大島にキリスト教が伝わつて四十年」、大島に療養所が設置されたその年に生まれた土谷も40歳「不惑」の年であり、「そ

れぞれに立派な記念行事のある事である」この年に本書刊行の意思をもったというのである。

では、木村武彦とはだれか。木村は発行人にして「序」も執筆し、表紙の「TAKEHIKO」のサインと「装幀」者の記載にあらわれているとおり、表紙絵の筆もとった絵心のある人物だ。発行所の住所である東京都世田谷区世田谷は、おそらく木村の住まいの在所だろう。すると本書は定価がついているとはいえ木村による自家版なのだろうか。この木村を詳細にあらわす情報は、本書にはほかにない。

ところで、大島の文化会館にある『青松』編集室には、2つの段ボール箱に入った『青松』の一群があった⁽²⁾。これは現在隔月刊で発行されている逐次刊行物『青松』の継続前誌となる手書き手づくりの「回覧雑誌」である。現在の『青松』と違って活版印刷ではない。その第23号(1946年6月)目次に「形なき十字架を求めて(寄稿) 木村武彦」との記載がみえる。タイプ印刷の文書がそのまま綴じられた木村の原稿には、1946年6月8日付で大島青松園の「林文雄先生」宛ての書簡もついている。「自分でも読めない位」の悪筆なので、「タイプに打ってもらひました」という原稿を入れたであろう封筒もいっしょに綴じられ、その裏書には「厚生大臣官房総務課／木村武彦」とのおそらく直筆の署名がある(住所は東京都芝区白金台町)。木村は厚生省の職員だった。

土谷は『癪院創世』発行ののち1950年4月20日付で、厚生省医務局国立療養所課と財団法人癪予防協会の編集になり、財団法人癪予防協会が発行人、厚生時報社が発行所となった著書『昔の癪のこぼればなし』を上梓する。この奥付で土谷は「国立療養所大島青松園患者」と示されている。土谷自身による「著者の言葉」には、『青松』に寄稿した文章を「療養所開設四十周年記念／私の入所二十周年記念」として本書にまとめたと記されている。この稿執筆の日付1949年4月20日は、『癪院創世』発行日の1か月まえである。「著者の言葉」のまえにおかれた「序」の執筆者は、「厚生政務

(2) この手書き手づくりの『青松』については、阿部安成、石居人也「後続への意志―国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.116、2009年9月)を参照。なお現在はおもともとあった段ボール箱(これも保存してある)ではなく中性紙の史料保存箱に移しかえた。

次官（参議院議員）／矢野西夫」。彼は率直に「土谷君とは会ったこともなく全く未知の人」だと、その「序」に記し、矢野が信頼を寄せる厚生省医務局療養所課の曾根正陽技官が政務次官室に持ち込んだ原稿だから、その刊行にあたって序文を寄せたと執筆の経緯を素直に明かしていた。

発行にむけた編集が同時期に進行していた土谷の著述である『癪院創世』と『昔の癪のこぼればなし』はどちらも、厚生省職員の尽力や推奨によって公刊されたのだった。おそらくこうした刊行物は少ないとおもわれる⁽³⁾。

木村は「序」の末尾に、『癪院創世』上梓への尽力者として、「岡山県の榊原先生、日本医師会の武井先生、福井先生、厚生省小河原事務官」の名をあげ、彼らへの謝辞を記した。「題字及び俳句」の小河原庄太夫（せうた）も厚生省職員だった。

Ⅲ

『癪院創世』上梓の経緯を土谷による「あとがき」（1949年2月26日付）にみよう。まず冒頭で、「長田さんは自分の育ての恩人である三宅さんの伝記の執筆を生涯の仕事としていた」と故人の遺編を伝える。ここにいう長田は長田穂波（嘉吉）、三宅是三宅官之治（清泉）で、霊交会創設者たちのうちのふたりである。長田はその原稿を1944年夏に脱稿していた。戦時下でもあり、その出版にいたらないでいたところ、彼が1945年12月18日に急逝する。その原稿は「キリスト教霊交会の筐底深く蔵されたまゝ、今日に至つて」してしまう。このことを「霊交会代表石本俊市氏から聞」いた土谷に、原稿の閲覧、貸与が許された。土谷の手にわたった紙束は、「福音の証者三宅清泉と脇書し「永生の輝き」と題した百三十七枚の原稿」だった。「あとがき」で土谷は『癪院創世』の原型がなにかを明かしていた。

さきにみたとおり、1949年はいくつもの記念が重なる年であり、希有な重層への土谷の思いが「私には泣き出し度いような感懐だつた」と吐露される。そして、「長田さんが書き得なかつた三宅さ

んの伝記を書く一方、出来れば長田さんも死んでいるのだから長田さんも書き加え、尚、救癪の大恩人である米宣教師エリクソンさんをも書き度くなつた」土谷はそれを石本に伝え、石本は「「救癪四十周年でもあり是非」と、激励された」ことが動機となってまとめられた『癪院創世』が出版されることとなった。同書は土谷の書下ろしではなかったのだ。

土谷には「不安」があったという。それは、「キリスト教に対する無知」とのことだ。土谷はキリスト教信徒ではなかった。おそらく、霊交会会員でもなかった。「従つて、信仰上の問題は全て「永生の輝き」に教えられ」、あわせて、「石本さんからは宗教上の御教示を戴き」、そのうえで、穂波がつけた原題を「「癪院創世」と改め」て一書に編みなおしたのだった。書名に籠めた意味は、「三宅さんも長田さんもエリクソンさんもよく知つている」との間柄から、「三宅さんが持つて来た新しい徳と愛に浄められ、確かに癪院の創世を意味したからであ」り、もう1つ、「不惑に達した癪院は社会厚生の見地から新しく見直されねばならぬ時期だからである」と説かれていた。三宅の開拓によって清められた療養所の聖さの始まりと、1940年代の実情をふまえた新しい始まりとによる2つの創世が仰ぎみられている。

こうした改題とその意図からすれば、本書は土谷の著作といいうる中身にかわっているということなのか。だから土谷は、「若し長田さんの多くの著述をお読みになつている方から見れば、この一篇はかなり違つた感じだろうと思う」との注釈をくわえなければならなかったのか。長田の筆とは違うかもしれないとの、まるで心がさざめくようすは、『癪院創世』は穂波の遺志を継ぎながらも自分の著述なのだという土谷の宣言ともいえる。

長田の遺稿となった「永生の輝き」の精神が土谷によって再生されて本となった『癪院創世』は、長田の三宅への敬意、その長田と三宅にエリクソンをくわえた大島での信仰の徒たちと土谷とのあ

(3) 国立ハンセン病資料館蔵書検索で調べたところ著者名を「厚生省」としてヒットした図書は86件、出版者では47件で、それらのなかに療養所在住者とおもわれる著者の刊行物は『昔の癪のこぼればなし』1点のみだった（閲覧2013年3月16日）。

いだにあった旧懐、そして霊交会を彼らから継いだ石本と土谷との懇親が充填し、厚生省職員の手によって上梓されてかたちを得た書物なのである。霊交会教会堂図書室にあったこの書物には、その表紙見返しに「謹呈／霊交会さま／勉」との手書き献辞があった。土谷自身から霊交会におくられた1冊だった（同書にはまた「大島霊交会蔵書印」の印影が押印されていた）。

ただ、長田が「永生の輝き」を脱稿したという1944年と、『癪院創世』が出版された1949年とでは癪をめぐる事態に明らかな、そして大きな変動がある。それは、癪を治す薬があると認知されていることである。だから土谷は、著作につける名に癪院の新生を託したのだった。いわば治薬登場という「社会厚生の見地から」、療養所は「新しく見直されねばならぬ」という土谷の主張が書名に籠っているのである。あるいは、この当為の指示は厚生省職員木村の意思だったかもしれない。

では、療養所の再検討はどういった方向や方針が考えられるというのか。それを土谷は述べていない。それではこの点を、療養所監督省庁の一員である木村の文章にみよう。木村による「序」はつぎのとおり始まる——「お互いの力でお互いに引き合い、美しくきらめいている星の下に、お互いの愛情によつて、お互いに幸せごつこをしている私達が存在しているのですが、この幸福であるべき筈の私達の世界には悪魔がいるのです」。彼には社会に対してなにかしらの一家言があったのだろうか。この「悪魔」こそが「癪!! 癪!!」であり、しかしそれに罹った人びとを「友」と呼ぶ木村は、「いつ明けるとも知らない暗黒の中を、血みどろの闘争を続けている友がいることを、貴方達は御存知でしょうか」と、彼ら彼女たちの「闘争」に着目し、その人びとへの関心の有無を読者に問うている。

いまや、「この長かつた暗黒時代も「癪は治る」という曙光がさしている」といいうる転換のときとなり、「治す者も、治される者も、癪患者の人間復帰を目指して、必死の格闘が演ぜられている

のです。彼岸はもう一歩なのです」と唱えるところに、土谷が明快に示しえなかった展望が、彼にかわって木村の記載で提示されている。こうした転換期、土谷の言をもちいれば「創世」のときであるにもかかわらず、「切実にして而も悲痛な血の叫びを、皆さんの耳には聞えないのでしょうか」と問わずにはいられない厚生省職員の木村だからこそ、「一日も早く血に泣く友が、私達の側に来られるようお協力下さるよう」との願いを籠めて、土谷の著書を発行したというのだった。血の隠喩を多用する木村の文章は、「血族」「解放」の語を用いて訴えられてきた⁽⁴⁾、伝染病患者であるがゆえに自分だけでなく家族すらもがうける迫害の解消という療養者たちの悲願を代弁しようし、他方で、生臭さのつきまとう難題だからこそ怖じけたり怯んだりすることなく、この難儀を共有して打開にむかうよう指示してもいたのである。

治薬以後といえるこの1949年であっても、いまだ「癪予防法」は生きた法律であり、療養者たちによる全国国立癪療養所患者協議会も発足していなかった。だから共闘の呼びかけが必要だったともいえるし、しかし他方で、療養所に生きるものたちが「私達の側に来られるよう」と厚生省職員が市民に協力を請う、あるいは指示するようすは、厚生省こそが、隔離を罹病対策への根本政策とする「癪予防法」に定められた療養所を監督する官庁だったのだから、その後の歴史を知るものからは指弾を受ける可能性がある。木村みずからが法改正に動けばよかったのだから。もっともわたしたちの手元に木村についての情報は少なく、省内で彼がどういった働きをしたのかはわからない。

IV

『癪院創世』とはどのような内容の著作なのだろうか。目次から全10章の題目をあげると、「一、一粒の麦」「二、荒野の試練」「三、白砂に祈る」「四、高鳴る讃美歌」「五、石も亦叫ぶ可し」「六、困つた人だよ」「七、霊交会」「八、島の聖者」「九、

(4) たとえば、「根治薬よ、出でよ」（『報知大島』第31号、1933年8月1日）を参照。大島の自治組織の機関紙というべき『報知大島』については、阿部安成監修・解説『報知大島』リプリントシリーズ国立療養所大島青松園史料1（近現代資料刊行会、2012年）で閲覧できる。

愛は強し」「十、永生の輝き」となる。さきにみた土谷の「あとがき」もふまえれば、この目次は、『癪院創世』が靈交会史そのものではないこと、もとよりそれと重なりはするが、びたり一致したそれそのものではないことをあらわし、また、長田が自分の原稿につけたという原題が、土谷によって第10章に再生されたことをみせている。

本文冒頭にはつぎの1文がある——「一九〇九年正月下旬、灰色の雲が低く垂れて雪空の冷い日だつた」。この冬空のした、「瀬戸内海の孤島を（香川県木田郡庵治村大島）中年の男が突然訪ねて来た」という。その男が三宅官之治だった。

『癪院創世』にはこの書き出しにすでに誤りがある。本書「大島青松園の沿革」にも記載されているとおり、大島での療養所落成は1909年3月28日のことといい、官報による設置は同年4月1日付となる。この年の正月にはまだ療養所の運営が始まっていなかったはずなのだ。

三宅たち物故者を追悼する園長野島泰治の弔文は、「島の開拓者の一人」としての三宅の訪島を「明治四十三年」のこととしていた（「島の聖者、智者」『藻汐草』第12巻第4号通巻100号、1943年5月）。『癪院創世』の記述が誤っているのだ。

本書にはもう1つ明確な誤りがあった。それは、靈交会の創立についての記述にみえる年の記載で、「七、靈交会」のなかに同会「会員規則」が転載され、その年月日が「昭和三年十一月十一日」となっていた。「大正三年」の誤記なのだが、これが後年の靈交会会員を悩ませることとなる（これについては後述する）。

史伝としての著述である『癪院創世』の記述のなかで、その物語の主演のひとりである三宅が来所した年と、そして本書に展開する物語の1つの核となる靈交会のその創立年——この2つの年次を土谷は書き誤ったのである。歴史記述者としてのおおきな失態と指摘しなくてはならない。

土谷が石本から借用した、靈交会の筐底に仕舞いこまれていたという長田の原稿は、2013年3月の時点で、大島のどこからもみつかっていない。穂波の手書き原稿のいくつかは、さきに記した機関紙『靈交』や靈交会手帳日記といっしょに、あらためて近年になってわれわれの目にとまり手に

ふれられるようになったことにあらわれているとおり、教会堂図書室の書棚にながらあるかは、靈交会会員からも忘れられていたわけだが、いまのところそこには『癪院創世』へと転生する長田の元原稿はなかった。当然のこと、長田自身が書いた原稿と出版された『癪院創世』との異同を確かめることはできない。

わたしは、両者にはかなりの違いがあると推察し、したがって、活字出版されたからといって元原稿が廃棄されたとはおもえず、ひいては長田の原稿は石本や靈交会へは返されなかったのではないかと考えている。靈交会教会堂や自治会事務所には、おそらく石本が整理したとおもわれる逐次刊行物などの綴がいくつも残っていた。教会堂図書室の書棚にあった、大島の自治組織が発行した機関紙の綴には、ていねいに「石本」の印影のいわゆる三文判が押してあった。こうした整理のようすからすると、穂波の元原稿が残っていないことがとても不思議なのだが、ほぼ教会堂の悉皆調査を終えたいま、それがみつかる可能性はかなり低くなってしまった。わたしはここで、長田の手書き原稿がどこへいったのかを究明しようとする姿勢をみせたいのではなく、土谷の著作としての『癪院創世』を幻の元原稿とつきあわせてその異同を確かめようとする所為が、無意味であり不要であることをはっきりとさせたかっただけである。

ここで述べておくと、『癪院創世』は穂波の元原稿の延長としてみればよいのではなく、むしろ本書は、厚生省職員である木村と療養者土谷との合作として、あるいは両者の共同作業の成果として読むべきなのだとおもう。ただこの指摘のために、なにか本省からの圧力や強い指導、あるいは要請が国立療養所大島青松園にくわえられ、そのために療養者の著述が捩じ曲げられてしまったと理解されるのであれば、それはわたしの意図するところとは異なる。これについてはまたあとで述べよう。

V

『癩院創世』において物語が展開するようすをたどろう。最初の章題にいう「一粒の麦」は、三宅官之治を指している。この章は大島の療養所にあらわれた三宅を描写する。冒頭で三宅のひとりなりをあらわすなかで、

眉毛がないので一見患者と知れたが、鼻が高く双頬がゆたかで、おつとりと長者の風格を備えていた。顔面には結節の吸収した小さい小皺があり、頬がたるんで如何にも善人間らしく、誰でも安心して親しめそうな好印象を与えた。

と、その登場のときからして三宅は人格者なのだった。このとき三宅は30歳台前半という。彼には故郷に妻子もあったが、「不幸発病したので強いて離縁し」との経歴も明かされる。柔和で真正な三宅の態度に療養所職員の対応も和らぐが、しかし彼がキリスト教信徒と聞くと「明らかに憎悪と敵意の色」に職員の顔がかわる。それでも澹如とする三宅は、

強いて装う強がりでもなく、何か背中に大きな証拠を持つていような、安心した確信が物腰に滲んでいて、憎めない好感を与えた。海岸にそゝり立つ巖のようであり、梔子でも動かぬ大丈夫のふうだった。終いには威嚇している方が不知不識温いものにうつとり抱擁されそうだった。

と、彼の人望があらわされる。「堂々たる偉丈夫だった」と、三宅は優しさと強さとが同居した人物として、初めから描かれていたのだった。

すでに熊本の回春病院で、「礼拝中心の療養生活をつづけるうちキリスト教の本質を理解し、同時に神に対する思想を啓発されて、遂に受洗して信徒に加わった」との履歴をもつ三宅は、大島にキリスト教を伝えるに十分な資質を有するものの、他方で、「彼は常に周囲を見廻して己を恥じていた」ところもあった。不当な卑下や過度の謙遜ではない三宅の控えめなようすがまた、人びとの心をつかんだ、という彼の人物像の造形である。

『癩院創世』第1章最後に展開する当時の療養所のようなようすをここに転写しよう。

施療患者を対象の療養所だから、月謝の心配

や気兼ねは毛頭なかつたが、重病人のベットの並ぶ三棟に看護人のいないのは、いくら何でも余り悲惨であり、三宅をひどく不安に駆立てた。病室はコンクリートの土間になつていて、二列に薄汚い木製のベットが並んでいた。建附が悪いので、隙間風は用捨なく吹き込んだ。低いベットに大地の冷えが直接伝つた。病人は上下二枚の煎餅布団にくるまつて、冷寒と病苦に震えていた。その病人に昼間は二、三人の看護婦や看護師が来て事務的に三度の飯は食わせたが、夜ともなれば孤独な病人が、病苦を訴える相手もいなかつた。死ねばそれきりである。軽症者が仕放題に喧嘩や賭博をする一方、薄汚い病棟には死臭が漂い、歪んだ病人の顔にはこの世の呪詛と悲惨と不幸が圧縮されて、真に鬼気迫る恐怖を覚えた。しかもそれが当然で誰も別に怪しまなかつたが、たつた一人三宅が来るそうそうそれを怪んだ。

——島の外に住む多くの読者の想像すら届かないであろう療養所の実相を活写したとみせられ、それを（回春病院との対比で）ひとり奇異に感じる三宅が大島に登場したのだった——「あらゆる悪徳が跳梁つて善悪美醜のけじめを失つた皆の目の前へ、突然不思議な光が射した」との喩えて三宅の来所があらわされた（『癩院創世』第2章冒頭）。

熊本の回春病院と瀬戸内海の大島療養所の2つの施設を知る三宅の経歴が特筆され、その意義が強調される——「三宅は身辺を見廻して余りに無智であり幼稚であるのに内心驚き、ひそかに信仰の危機を感じた。温床のような回春病院の信仰では、荒野の試練に耐えられない事を悟つた。しかし、聖霊は彼と共に存して、この不毛の荒野に耐えられるよう常に訓導し給うた」——ここにいう「荒野の試練」が第2の章題で、三宅はその実践として、「重病棟の看護人を奨んで」つとめ、「読書」を怠らず、看護作業賃を故郷へ送金した。重病人の看護は、「世間から疎ぜられた療養所の中でも悲惨中のも一つ悲惨な場所」での作業であり、それを担ったがゆえに当初は「異端者」として「狂人扱い」されもしたが、三宅の「少しも屈託のない明るさ」「親切で優しい事」はまた、「人の嫌が

る看護を吾れから奨んでする彼に、損得や蔭日向のあろう道理もなく、一にも二にも病人本位だ。その真摯な態度から人は自ら真実を嗅ぎ分けた」と表現されるほどに、「患者間は元より職員の方でも評判にな」っていった。

ただし、「頭脳明晰という方ではないが」と彼の玉に瑕ともいえそうな描写も登場し、だがそれは彼の「読書」と結びつけられて療養所では得心されたとうかがえる記述となる。

天金皮表紙の立派な本の載つたベツトにだけ射していた陽が、水仙の花のような馥郁たる香氣と共にいつか病室中を漂い、一度でも触れるとその人の心を浄めた。ちょうど病室の周囲を取囲む野草が、春の光に萌出る生命を与えられるよう人々に美しい愛の息吹を与えた。

とまで喩えられ讃えられる三宅の日々の同病者への慈しみが、彼自身の修養の実践と聖書読みにみられる信仰と結合するとき、「病人に三宅は救世主のように慕われた」との讃美が可能となるのである。これは穂波の筆ではありえないと断言してもよい。信徒ではない土谷の比喩である。篤い信仰心の徒と成長してゆく穂波にとって、救世主はイエスだけであり、その語を喩えに用いるはずがないからである。

VI

『癩院創世』第3の章題「白砂に祈る」は、信仰の順調な展開をあらわしているのではなく、逆境においてなおつづく試練の謂である。大島の療養所には職員のキリスト教信徒もいた。だが事務係長だった信徒への排斥が強まったあげく、彼は辞職に追い込まれ、さらには、「キリスト教牧師伝道師の来島が療養所から正式に拒絶され」、「職員の中に残っていたキリスト信者も根こそぎ一掃され」てしまう。信徒ひとりとなった三宅をめぐっては、「三宅さんはえ、人じやが、キリスト教が好かん」との声があがったという。もはや三宅をじかに知るひとのいなくなった現在の大島でも、三宅が語られるときそのひとの口にのぼるほどに伝えられてきた三宅評である。このときの三宅を土谷はつぎのようにあらわす。

三宅はこの現実を心から悲しんで祈つた。迫害の只中に孤立して彼の霊は神に向いて血を吐く思いで叫びつづけた。祈に汗が滴り落ちた。小島の白砂に拝跪いて祈る彼の姿は哀れにも尊いものだつた。慧き農夫は先ず土質を調べて畑をよく作り、それから種を下す。すると、大地は喜んで三十倍六十倍或は百倍の実を報ゆというが、彼にとつて重病棟看護は神の閉じ込め給える尊い月日であり、奇しき準備の時だつた。彼は祈りつゝ、働きつゝ、辛抱強く種を下すべき土地を肥やして行つた。

——このあたりの土谷の表現が木村による表紙絵となったのだろう。

屈することなく、キリスト教弾圧といってよい苦境においてもみずからを律し、「どんな作業にも蔭日向なく働いた」三宅は、「間も無く『おつさん』という愛称で呼ばれ、皆の信望を一身に集め」、「不知不識人々から師表と仰がれ」、「赴任して来た小林所長は三宅を識つて以来、一目で彼の人格を見抜いて信頼した」と記された。

こうした三宅の倦まぬ弛まぬ絶えざるカルティヴェイトcultivate（耕作する、開墾する、陶冶する、育成する）が長田穂波を生んだと物語られる。長田嘉吉という名の18歳の青年が三宅の部屋へ配されたのだった。この青年も「開所と同時に徳島県から来た」。嘉吉青年についての描写をみよう。

長田は三宅とちがつた干性癩だつた。眉毛はあり、顔は普通人と何ら変らなかつたが、手足は萎えて指がなく、余程不自由そうだつた。きかん気のやんちや者で、右腕に「一心」と刺青までして人目を惹いた。三宅が奇異に感じたのは、そのやんちや者が三宅零嶺^{（ママ）}とか徳富猪一郎とかの著書を四、五冊持っていた。

——指がないための不自由さ、刺青をするほどの鉄火風でありながら他方で読書もする——「腕に刺青しているかと思えば難しい本を読み、何が面白いのかあの手で毎日字を書く。やきたいも無い、世の中には妙な道楽があるものさ」の言が、この長田をめぐる共通した人物評だとあらわされている。刺青の文字についてはテキストによって異同があるものの、読書する勇み肌というべき長田穂波

像はこののちもくりかえされてゆくこととなる⁽⁵⁾。

三宅との距離が近くなった長田は聖書を読み始め、「聖書に対する知識が高まり、それにつれておつさんと長田は切つても切れぬ^{〔ママ〕}一身同体の親しい間柄にな」り、三宅は「一生懸命働いた金銭を長田の小遣と書籍を買う費用に当て、彼をして後顧の憂なく勉強させた」。

この章では、三宅が「一同に懇請されて三回目の患者総代を勤めていた」ことが示される。人望があり人びとを率いる資質のある三宅と長田とが信仰の話をするなかにあらわれた、長田のいわば信心の覚醒ともいうべき場面で、

三宅はいきなり長田の手を執り、涙を流して喜び、彼の為に心から祈って祝福した。／「おつさん、俺も一緒に祈るよ」／長田は生れて始めてのこの日の祈りに興奮し、全身びつしより汗を滲ませた。青年長田嘉吉こそ、後年霊界に隠れもない長田穂波の前身だつた。

と長田の転生と云う様相が描写されたのだ。

三宅、長田、さらに2、3名がくわわることで、礼拝集会も聖書研究会も部屋を出て海岸の砂浜でおこなわれることとなる（「四、高鳴る讃美歌」）。讃美歌を教わるということで、かつて来島が禁じられたエリクソン夫妻がまた讃美歌教師の役割で島にかよい始める。エリクソン夫妻は「三宅や長田とは特別親しくなつた」。こうした信仰の表明に理不尽な排斥がくわえられるが、しかしそれを機に、「キリスト教も漸く他の真言真宗と共に肩が並べられるようにな」り、「会館」を共同利用しうるまでになった。ここでの三宅評をみよう。

患者間の中心人物だつた三宅は又選ばれて総代になつた。一見して何の変哲もない、平凡な優しい親父に過ぎなかつたが、触れる者を焼き尽くす彼の祈の火はやがて全島に燃え広がり、彼の伝えた徳は救済史に宗教界に活ける神の生命の収種として、多くの人を救う火熱たらしめたのである。

信仰の徒が、その宗旨とはべつに、島の代表者にくりかえし選ばれるほどの人望を集めたというのだった。

VII

長田の成長が物語られるとき、それは三宅の支えがあつてのこととあらわされる（「五、石も亦叫ぶ可し」）。「三宅は長田の長所と短所をちやんと見抜いて、蔭になり日向になつて庇い、進むべき方向を示して激励した」——たとえばそれは、長田は「性質が政治には向かない」「聖書の研究に没頭して、生活をぶち込んだがえゝ」というぐあいで、総代を務める多忙さのなかでも三宅は、長田のひらく聖書研究会や感話会に「一番熱心な聴講生」として出席した。

穂波長田嘉吉は三宅のこのような大きい愛によつて、だんだん成長して行つた。長田なくとも三宅は語られるが、三宅なくして長田は語れなかつた。聖書そのまゝを実践する三宅と、長田の学問的労作とは本来二ツに区別されるべきでなく、言い代えと、二人分合したものが五尺四寸、二十貫の巨軀だつた。

——本書冒頭に「五尺四寸、二十貫という立派な体格」とあつたとおり、この「巨軀」とは三宅を指している。三宅と長田は一体だとみせられるものの、島の先導者である三宅の優位性はゆるがなかつた。

島がかわってゆく——「相愛の歩調も高く一路前進する現実が徐々に衆目を惹くに至つた。個を活かす徳は又全体を活かす徳でもあつた。個の生活倫理は全体の生活倫理と別箇ではなかつた。神の福音によるところ、社会も亦、愛の人格的救いだつた。三宅の全人格に照出された小さな群は、療養所に対し国家社会に対し、愛と心理の人格的救済と向上とを確信して祈りつゞけた。〔中略〕彼らは法律や政治や経済や芸術だけでは、人の靈魂を潔め得るとは信じなかつた。もう一つ神の愛が加わる時、始めて美しい生命が吹込まれると思つた。キリストの教えは決して個人主義でなく、個と共に全体の救いが目的だつた」。

患者作業の奨励金も養鶏と購買部の経営も互助金制度も三宅のお蔭とその成果が讃えられながら、しかし依然として「三宅さんはいゝが、キリスト教が玉に疵じや」の言が提示されて、「正義

(5) たとえば、国立療養所大島青松園入園者自治会編『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（国立療養所大島青松園自治会（協和会）、1981年）など。

の為には身を挺し、推されて患者総代を勤めることと二十一期（延十ヶ年半）着々改革すべきは改革して徳望は全島を尖被しながら、尚、宗教的迫害を免れ得なかつたとは」と著者の憤慨も記される。少しずつ表現をかえてみたび記された「三宅さんはい、がキリスト教が悪い」の言辞があらわすおおかたの療養者の心性は、宗教や信仰への理解のなさだともみせられた。それでも三宅の慈しみは絶えない。「困つた人だよ」との『癪院創世』第6の章題は、長田が三宅に対して抱いた感慨だった。一本気な長田は三宅の所業が御人好しにみえたわけだ。そのうえで長田の信仰が深く広くなってゆくようすが描かれる。

三宅の発起により会がつくられ、長田の執筆によりその会員規則が整えられる（「七、霊交会」）。信徒団体である会を運営するために不可欠な準則をみよう（一部原文のカタカナをひらかなにかえた）。

一、基督教者及び求道者を限り会員たり得ること。／一、大島基督教霊交会と名附くること。／一、会員は集会を重じ祈りて聖き交りをなし礼拝を行うこと。／一、イエス・キリストを会長とすること。／一、受洗者より世話人若干名選ぶこと。（但期間は一ヶ年とす）／一、禁を犯し所則を破る者は除名す。^{（ママ）}
／一、聖書を以て会則とすること。／昭和三年十一月十一日

——霊交会の規則はほかに、会の機関紙である『霊交』第3巻第5号（1922年11月1日）掲載「創立より現在迄の略歴」に概要が記され、同紙第175号（1933年6月10日）掲載「霊交会内容」に「会員心得」として全文があげられている。ただしそれらは『癪院創世』に載る規則と同一ではない^{（6）}。

会長がイエスであるため、「当然、三宅が副会長」となった。信徒団体の組織化もまた、大島療養所の大きな劃期となった——「明るい太陽が上ると同時に怪光は滅びるものだ。会員組織になつて、秩序と統制ある霊交会が生れると、正義の声は強く四辺に木霊した。他宗教もこれを見習つて会を組織し、葬式の行事に至るまで良心的に改善され

た。実に霊交会の誕生こそは、自棄と頽廢の混沌たる暗黒の大地を訪れた黎明だつた」——始まりの夜明け、陰から陽へ、暗から明へと、喩えられた霊交会の創設を経て、「真面目に生きるなら霊交会へ行け」との言が人びとの口にのぼるようになったという。信仰と修身や克己とが結びつけられたのである。

「国禁」を犯すものを、そのほかの「不正行為」をなすものを「除名する強硬決議」が宗教をこえて実現し、「小さな群の小さな火は遂に全島に燃え上り、燃え拡がり、協力の下に次から次へ改革の実が結ばれて、患者自治会創立へまで成長して行つたのである」と、のちの自治活動の展開までが霊交会の誕生と連結されて記されたのだった。確かに、三宅も、また、土谷に長田の原稿を貸した石本はのちのこととなるが、自治活動の代表者を複数の任期にわたって担った療養者だった。

会員数が増え、長田は「聖書の研究に没頭」し、療養所外から「天幕」が寄贈され、「いつの頃からか社会の教友から有難い便りを受けるようになった。返事代りに誌名を「霊交」とし、たつた八部毛筆で認めて出したのが、十年後毎月一千部以上の出版を恵まれるに至つた霊交会の機関紙「霊交」の実に濫觴だつた」と機関紙の始まりがたどられている。毛筆による機関紙の発行部数を10とするテキストもあるが、どちらが正確かはともかくも、この毛筆版『霊交』はいまのところみつからない。

せっかくの天幕も「激しい嵐の朝」に破けてしまい、そののち「祈りの家」と名づけられた「二間に四間のバラック」が建てられ、ついで療養所拡張により移転させられた先では、「二間に七間の本間に押入を付け、図書室の代用を兼ねた物」を建て、そして、「エリクソン、オルトマンズ両師の斡旋で、アメリカのミツシヨン・ツウ・レパーの寄附」によって、「つゝ、咲く島山の中腹に東西の景勝を鳥瞰し、偉容を誇るコンクリート建の聖堂」ができあがったのである。この寄附にさいしては、「建築物は療養所へ献納すること。但しキリスト教の礼拝に専用すること。附属図書室は

（6）『霊交』紙上の記事については、前掲阿部「史伝としての『霊交』」を参照。

全患者に開放すること」の付帯事項がついたとのこと。

これが現在も霊交会会員たちが毎週日曜日に礼拝に集まる教会堂である。

VIII

『癪院創世』第8の章題「島の聖者」がまた、後年の霊交会会員を考え込ませてしまう。それはまた後述するとして、ここには療養所官吏の就任が、大島での大きな劃期と評価されている。「霊交会の誕生が対内的一大黎明だったとすれば、野島所長の就任は希望と光明だった」——このときの新所長が本書『癪院創世』が捧げられた野島泰治である。「患者自治会の運営も本格的軌道に乗」ってきたこと、野島所長のもとで庵治から引いた電信電話が開通となるなど「大島の療養所も漸く近代化の一步を踏出した」ことがあげられ、

単なる癪患者の隔離所に過ぎなかつた療養所が、急速に療養所らしい形になり、開所当時恐怖の余り定員を下廻つた病友も、社会的理解が進み、誤解が修正され、生活改善と俟つて^(ママ)遂次増員された結果、昭和十年には五百人となり、島山の頂上に建立された納骨堂には既に千幾百の失歿病友を数えた

と大島の療養所の発展と星霜がまとめられた。ここには世代交代や新参加者があつたわけで、「古い者は新しい者に、三宅や長田の功績を語り継ぐのを忘れなかつた。三宅さんが斯うしたと語る事は、一つの大きな誇りでさえあつた」といわれるほどに、大島に生きるものたちにとって自分たちの歴史を構成する重要な要素にふたりの事蹟が位置づけられたのだった。

三宅が還暦を迎え、戦時下にエリクソン夫妻が帰米をやむなくされ、公立だった療養所が国立へと移管され、穂波の著書が13点列举されたところで、「三宅に育てられ励まされて長田は既に数々の著作を持ち、島の聖者として霊界に重きをなしていた。三宅の偉大な徳が長田の筆を藉りて羽ばたいたのだ」との評価が提示される。ここにあるとおり、章題にいう「島の聖者」とは、長田ひとりにあたえられた榮譽の表現だったのである。このころ、三宅は70歳、長田が53歳だったという。

その三宅が急性肺炎で寝込む。「三日間祈禱会が連続的に開かれた」大島が、「全島深い憂色につゝまれた」ほどと喩えられた。「各宗各派」も「向う七日間三宅氏平癒祈願祭」をとりおこなつた。その三宅の死を経て、『癪院創世』の記述は故人を絶賛した。他方で、

ある人は兼てから、三宅さんのような人の臨終に接したい、どんなに立派だろうと語り合つた。しかし、その日天上より音楽も聞えず、紫雲も舞い下りず、花も散らず、怪鳥も啼かず、星も落ちず、天地は自然のまゝに巡つて、聖者の死はいとも平凡だった。神に全任して誠に素直な昇天だった。

と死に臨んで瑞兆があらわれはしなかつた、その平凡さもまた三宅を讃える素材となつたのだ。三宅の末期は、「一点の見栄も衒いもなく、死の彼岸の永生の輝きに合掌して「有難い有難い」と、喜悅のうちに大平安に帰天した」と描かれた。長田が執筆した「三宅さんの伝記」につけられた原題「永生の輝き」の語は、土谷によって書名にはもちいられず、この三宅の今わの際の描写に埋め込まれたのだった。素直にこのあたりの『癪院創世』を読めば、長田は多数の著作を公刊したがゆえに、また三宅は平凡な「素直な昇天」を機に、「島の聖者」として崇められたのである。

三宅の葬儀は「協和会葬（全患者を以て組織する自治会の別称）」と決まつたと示され、長田の「式辞と説教と告別の辞を兼ね」た会葬者への挨拶が『癪院創世』に転記された。そこに明記されなかつた三宅の死亡日は、1943年3月11日だった。

三宅の遺骨が彼の故郷に運ばれたことが伝えられ、あらためて三宅の人物像が提示される（「九、愛は強し」）——「誰も彼の口から名論卓説を聞いた者はなかつたが、たゞ病友は彼を身邊に意識するだけで心丈夫だった。柔和な彼の身邊から温いミルクのような匂いが発散し、それがあたりを柔く抱擁した」——三宅はどれも弁舌鮮やかとはいいがたかつたようだ。そうした技能とはべつに、いるだけでよかったとは、最上級の誉望だった。

ついで長田の死が記される。その年の9月の感話の内容と、その年のクリスマスの準備を終えたことを記したうえで、「血涙を絞つて告別の辞を

述べた」野島園長の弔辞が転載される。そこには長田が「不自由な手にペンをくゝりつけて書いた」その執筆のようすもとらえられていた。困難をともなう執筆のすえにまとめられた著書は「広く世の人々に読まれ、多くの者を奮い起しめた」と、いわば長田の著作がもつ力もみせられたのだった。穂波は第二次世界大戦終結後の1945年12月18日に死んだ。『癪院創世』は穂波の死亡日も記さなかった。

『癪院創世』第10となる最後の章の題は、本文では「永遠の輝き」、目次では「永生の輝き」となっている。後者であれば、土谷みずから執筆した「あとがき」にみたとおり、長田による元原稿の題と同じである。「永遠」と「永生」のわずか1字の違いではあるが、そこに誤りがなかったかのように軽んずることはできないはずだ。『癪院創世』という著述が、土谷自身ではなく長田の原稿を元にしてあらわされたからだ。ほんの1字の違いではあれ、永遠と永生では意味も異なるのだから、この誤記をよしとするのであれば、『癪院創世』を土谷の書き下ろしと扱うことになってしまう。それが土谷の意思かどうかはべつとしても。

記述は、第二次世界大戦後の「幸いにして爆撃を免れた島の平和な表情には何の変りもなかった」ようすが細細と描かれながら、描写の視線は霊交会教会堂のなかへと入る——「ドアを静かに押して礼拝堂に隣する図書室へ這入ると、鴨居に掲げてある大きな写真が先づ目についた。和服姿の田舎の村長然とした、紛れもない三宅だつた」。そしてもう1枚の写真が、「夫人の手によつて届けられて来た」「エリクソン師の写真」で、この2枚が図書室に「並べ」られた。1946年に昇天したエリクソンのようすも記された。

「病友は毎日其処〔図書室〕に集つて祈会を持つに先立ち、エリクソン師と三宅の写真を仰いだ。すると、慰めと励みと、慈しみと神の福音が、誰の胸にも滾々と湧上るのを覚えた」と、『癪院創世』の記述は終わった。

いまでも教会堂図書室には、エリクソン夫妻と三宅の肖像写真が壁に掛かっている。

IX

『癪院創世』は、霊交会創立80周年を記念して、1994年に「再版」された。装幀がかわり、木村の表紙絵がなくなってしまう、この書がどういった著作物なのかを知る手がかりが再版から1つであつても削られたことを残念におもう。

このときの霊交会信徒代表曾我野一美は、この第二版に「再版に当たって」と題した文章を寄せた。その冒頭で、土谷が1951年に「社会復帰」をしてから1991年に亡くなるまでの略歴を記し、彼が「仏教信徒」だったと示した。曾我野は大島で発行された逐次刊行物『青松』（活字版）の第49巻第2号通巻第475号（1992年1月）に、土谷への弔文を寄せていた⁽⁷⁾。

『癪院創世』をまとめた土谷を、その社会復帰後のめざましい活動をふくめて讃えたのちに曾我野は、「いま、なぜ再版なのかであるが、これが少しややこしい」と稿を展開した。霊交会の創立年は、『癪院創世』によると1928年で、他方で、1964年に創立50周年記念として発行した『霊交会創立五十周年記念誌』には、「三宅さん、長田さんにつぐ霊交会の大先達」である石本俊市が、霊交会創立年を1914年と記していたから、「少しややこしい」と曾我野はうけとめたのだった。曾我野は「石本さんという折目正しい几帳面な人が、確信を持って書かれた文言である」と後者を重視し、かつ、「長田さんが書き遺した原稿を土台にして、それに肉づけしたとあることからして、本書の文言の真正を否定することはできない」と前者への尊重もみせた。また、『癪院創世』には、霊交会の創立を三宅が大島に来てから20年めとする記述もあることから、1928年創立とする「説を無闇に否定することはできない」と判断してもいた。

このように「少しややこしい」事態ととまどいをみせながらも、曾我野は1914年霊交会創立として、それから80年後に『癪院創世』を再版したのだった。『癪院創世』にある「昭和三年」の記載は曾我野が疑ったとおり「大正を昭和と誤植した」にすぎないのだし、彼に判断を迷わせた三宅来島をめぐる記述は、『癪院創世』を発行する1949年

(7) この曾我野も2012年11月に亡くなった。曾我野が『青松』に執筆した稿の目録を阿部安成「散文のひと—国立療養所大島青松園在住者の死」（滋賀大学経済学部Working Paper Series No.182、2012年12月）に収載した。

のこのときが、土谷自身が大島にやってきた1929年から20年めであることと混同したと、わたしは推察する。

曾我野はさらに「なお、一、二のことをつけ加えておきたい」と、本書の記載をいじらずに注文をつけた。「キリスト教大島霊交会の責任において再版するにあたっては、これには一顧を払わなければならない」との責務を自覚しての注文である。それは、『癩院創世』のなかの「文言に三宅さんや長田さんを指して「島の聖者」と表現したところがある」ことについてだった。聖書の記述にのっとれば、「神以外はすべて罪人であるということであり、聖人などいる訳がない」のだから、「聖パウロも、聖ペテロも、あるいは聖ヨハネも反聖書的であり、敢えて尊称を用いるとすれば、パウロ先生でよいだろうし、ペテロさんでよく、また三宅さんや長田さんでよいということである」——これが曾我野の説くところだった。

霊交会創立50周年の大きな節目には、会員などからの寄稿を元にした選集^{アンソロジー}が編まれ、それから30年後の創立80周年のときには、かつての刊行物の再版が発行された。曾我野はこの再版された書籍が霊交会にとってのなにになるのかを示さなかった。だが、長田が三宅とエリクソンについて書いた原稿となれば、それは霊交会にとっての「大先達」の事蹟を記録した正史の地位が授けられるだろう。では仏教信徒の土谷と霊交会とのかかわりはどういったものだったのだろうか。『癩院創世』そのものも、再版にあらたにつけられた文章も、それを明らかにしてはいない。

創立80周年のときに30年まえと同じように関係者の寄稿によって記念誌を編まなかったその理由には、おそらく執筆者が集まりそうになかったという事情がもっともよく当てはまるだろうが、そうした会にとっては残念なつごうを越えるべく、霊交会の歴史を物語る唯一の書物としての『癩院創世』を再版することとしたのだろう。その再版

では、会の創設年というもっとも重要な記録の誤りが正され、仏教信徒による誤った賞讃についての正しいとらえ方が説かれ、信仰にもとづいたあるべき正史の姿が整えられたのであった。こうした修正をみても、やはり初版の『癩院創世』は土谷の著作だったし、他方で再版刊行の1990年代中葉のこのとき、霊交会教会堂図書室の書棚のなかにある創立第4年次発行の機関紙『霊交』も礼拝などの日録が記された手帳も、その所在が霊交会会員からも忘れられていたのだった。

X

国立療養所大島青松園の霊交会を対象とした研究論文はほとんどなく、随筆などのたぐいもまずない。日本ハンセン病者福音宣教教会が発行した『全国ハンセン病療養所内・キリスト教沿革史』（1999年）や好善社が発行する逐次刊行物『ある群像』（第90号、2006年12月）に会員や関係者が霊交会の概要を記したくらいで、したがって、『癩院創世』や『霊交会 創立五十周年記念誌』を参照したり引用したりして霊交会の歴史をきちんと明らかにしようとした稿はまったくといってよいほどなかった⁽⁸⁾。べつにいうと、霊交会の過去の事実を提示するための典拠として『癩院創世』が引用されたり活用されたりしていないのだ。こうした研究上の空白や怠慢といった事態があらたまり霊交会に興味が寄せられ、あるいは、癩そしてハンセン病をめぐる療養所における信仰についてもっと関心が高まったとき、さきの2著のとりわけ『癩院創世』はどのように読まれるのだろうか。

わたしは典拠の曖昧な記述が多い『癩院創世』を、過去のようにすを明らかにして歴史を記述するための材料として扱うなどいいたいのではない。おそらく、『霊交会 創立五十周年記念誌』が編まれたときよりも2013年のいまの方が、霊交会や大島の療養所にかかわる歴史資料は整理されて閲覧の手立ては整っている。そうした史料環境のなか

(8) かつて『ある群像』はその第26号（1974年6月）のほぼ全紙面を当てて『癩院創世』を抄録したことがあった。なぜそうした紙面構成にしたのかの説明がないが同号の表紙には「一人の証し人がいた。かつて、そして今も黙殺され続けるライの暗い歴史に、ひとすじの光を投げかけた男。彼の三十余年にわたる闘いの日々が今、ここに語られる……」と記され、ここにいう「一人の証し人」として三宅をとりあげたとうかがえる。同号の『癩院創世』では土谷執筆の原著同様に「島の聖者」の見出しがあるが、そこでは穂波についての記述がいったい削除されてしまい、原著とは異なる内容となっている。奇妙な改変だ。だがこの改変によって、構成において穂波の元原稿にちがついたともいえる。

で、どのように『癪院創世』を読むことがその書史にふさわしいのかを問うているのである⁽⁹⁾。

『癪院創世』が編まれそれが刊行されたときは、プロミンが実用され、大島青松園創設40周年が祝われ、また園内では、逐次刊行物『青松』の活版刷りが創刊され、霊交会教会堂のまえには三宅とエリクソン夫妻の記念碑が建立された時世だった。来し方をかえりみ、行く末を展望する区切りの時間が意識される節目だった。

このとき、大島でもっとも多く文字を書きとめ、そのための時間をはるかにこえて思索に日々を過ごした穂波が、愛と祈りと徳のひとだった三宅の歴史をあらわしたという原稿が、三宅と穂波にくわえてエリクソン夫妻も知る石本と土谷とのつながりを介して、あらためてみつけだされ、そこに厚生省職員の手がくわわって書籍というかたちを得たのだった。著者としての土谷と発行人である木村とが強く抱いた創世への希望と意思とが、それらをしっかりと世のなかに訴え、人びとのなかに刻みつけてゆくために必要としたいわば跳躍台が、信仰や友好によってつながる大島のいくにんかの結束の力だったようにみえる。三宅、穂波、エリクソン夫妻、石本、土谷、さらには『癪院創世』が捧げられた野島や、第二次世界大戦の戦時下に園内の刊行物がなくなったところで手書き手づくりの「回覧雑誌」をめぐる同人のひとりとなった医官の林文雄などもくわえた園内での人びとがつながる力が、癪が治る病となったとき展望された療養所の創世を現実のものとしようとするときの原動力として活用され、それが『癪院創世』という書物のかたちとなってあらわれたとわたしはおもう。だからこの書は、穂波の元原稿とはその内容を大きく変えているだろうし、土谷ひとりの書下ろしとみなす必要もない。さまざまな人びとの結びあいを発信するこの書史は、その意味で大島在住者いくにんかの正史となりうるのだった。

『癪院創世』の書史をそう読むとして、ここであらためて、ではこの書に結びあいがあった

人びととはだれかを問うてみよう。もっといえば、そのひとたちの性はなにかという問いである。

本稿冒頭でみたとおり、霊交会を軸とした大島での信仰や療養や、あるいはそこでの生そのものといってもよいようすを歴史において記した書籍にはもう1つ『霊交会 創立五十周年記念誌』があった。同書に寄稿（故人の旧稿転載もふくむ）した31名のうち8名が女性だった。そのなかには目のみえないひともある。同書は、いまから50年ほど昔の時代において、これだけ多くの女性が執筆陣にくわわっていたこの1点において、かなり異色な刊行物なのである。同書の構成は目次にあられておおり、園長などのいわばお歴々と物故者たちと霊交會會員とを分けた3部構成になり、女性の稿がすべて収められた第2部についてみると20ある稿のうち8編が女性の手によるとの高率となっている。療養所では全体に数でいうと女性よりも男性はるかに多いと知られている。それもふまえれば、この記念誌における女性の重用は特筆すべき事態なのだ。

『霊交会 創立五十周年記念誌』の編制とくらべると、『癪院創世』は男一色だ。「エリクソン師夫妻」の語があっても、その記述にロイス・エリクソンは登場せず、彼女はまさに刺身の妻の役割でしかない。穂波の英訳詩集『燃ゆる心』の翻訳はロイスの仕事だったのに、その功績はまるで記されていない。いまでこそ大島では、塔和子の詩が賞讃されるが、かつては、療養所の自治も創作も作業も、男によるものととらえられ、それが男によって評価されてきた嫌いがあった。その数が少ないにせよ、女も自治を担い、女も俳句を詠み、女もそれにふさわしい作業にくわわっていたことが見過ごされてきた。『癪院創世』もそうした療養所の機制にある書史だった。

では、『癪院創世』の表紙に裸婦を描けばよかったのか。もちろん、ことはそう単純ではない。また、よくいえば、木村の表紙絵は人物の性を定めていないようにもみえる。それはともかくも、大島で女を歴史のなかに記そうとしても、その手立

(9) 「書史」の用法と観点については、阿部安成「島の書、書の園—国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第2号、2011年3月)を参照。

てとなるテキストが豊富には、あるいは充分にはないという事情がある。では、どういう観点を設けて、史料の不備や欠落をふまえて、なにを描けば療養所の歴史を叙述したこととなるのか。ここで議論は、歴史学そのものが抱える問いにもどってしまった⁽¹⁰⁾。

大きく構えれば、史料というテキストは過去のなにをあらわしているのかとの問いである。『癪院創世』は、そこから霊交会や大島の過去のようすを事実として引きだすには脆くて弱弱しいテキストにみえる。霊交会機関紙の『霊交』が閲覧可能となったいまとなつては、それをもちいた方が確かな過去をたぐり寄せられる度合いが高い。では『霊交』をみられるいま、『癪院創世』は不要なテキストなのか。

『癪院創世』は、1940年代までの大島の内外を結ぶひととひととのつながりについての、いわば証言としてわたしたちのまえに遺されたテキストなのである。土谷は同書刊行の翌年にまた著作を発刊し、その翌1951年には社会復帰してしまう。ひとのつながりの環からひとり抜けたといえるが、彼は島外から活発に『青松』への寄稿をつづけてゆく。土谷が『癪院創世』刊行時に社会復帰を予定していたかどうかはわからない。それはいまとなつては確かめようのないことながら、『癪院創世』は、そこに名が記された男としてひとり生きている石本におくられた土谷からの哀別の書のようにみえる。

この書の記され方を吟味したのは、これまでに、その再版を担った曾我野ただひとりだった。彼は中途からの信徒だったが、なにより聖書にのっとって『癪院創世』に記された賞讃の弁を修正し、また本文についての厳格な校訂者となったのだった。

かつて確かにあった人びとの結びあいの証跡として『癪院創世』はあり、また、ほとんどの霊交会信徒にとってその中身に手をつけてはならないかのような重みをもって本書は生きていたのである。

○

筆に残った滴がおちたように、いくつかのことを記しておこう。いま大島へいってお会いする方々のなかに土谷勉を知るひとはそう多くなく、しかも判で押したような印象が語られる——物書きだった、社会復帰した、というぐあいだ。

2013年2月16日に島外でお会いした元大島の住人の方からは、ずいぶんとはっきりとした土谷評をうかがった。みんながもっていないセンス、バランス感覚があり、核心をつく議論をする、指導者を指導しうるひとだった、とのこと。その方は土谷を尊敬し、ずいぶんと影響をうけたとも陳べたから、これはだれにも共通する土谷評ではないかもしれない。わたしはこの評だけで土谷の人物像を確定しようとはおもわない。土谷を知るひとがだんだんといなくなってゆくなかでの、1つのキューcue（きっかけ、手がかり）としよう。

[附記]

本稿は、2011年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究題目「20世紀日本の病の重層（complications）と生命観の文化研究」の成果の1つである。

(10) ただし癪そしてハンセン病をあらわす作業は歴史学にのみ許された特権ではないことを自覚している。癪そしてハンセン病をめぐる展示にかぎって述べると、「子ども」「盲人」「社会復帰」を論点として発信してきた国立ハンセン病資料館の企画展には大切な仕事があると考ええる。